

# テレビ会議システムを用いた小学校6年生の 児童と学生との意見交流

田上 哲\*・西原 明\*\*・長谷川順一\*\*\*  
(附属教育実践総合センター) (附属坂出小学校) (数学教育講座)

\*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部  
\*\*762-0031 坂出市文京町2丁目4-2 香川大学教育学部附属坂出小学校  
\*\*\*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

## On Exchanging Views between Grade-Schoolers with Students by Videoconference

Satoru Tanoue, Akira Nishihara, and Junichi Hasegawa

\* \*\*\* Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522  
\*\* Sakaide Elementary School, Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 2-4-2,  
Bunkyo-cho, Sakaide 762-0031

**要 旨** テレビ会議システムを利用した児童と学生の交流会が計画実施された。それに参加した児童並びに学生に対するアンケート調査を行い分析検討した。児童への調査から、今回の本システムを利用した交流会においては、コミュニケーションが成立する基本的要件を満たしており、交流が有意義なものになったことが示された。学生への調査は、参加学生が少数であったため、試論的なものにとどまり、アンケートからは十分なことを示すことができなかった。今後、学生の参加者数を増やすとともに、本研究で明らかになった課題について追究していくことが必要である。

**キーワード** 総合的な学習、テレビ会議システム、児童と学生の交流会

### 1 はじめに

テレビ会議システムが香川大学教育学部附属教育実践総合センター(当時は附属教育実践研究指導センター)に導入されたのは、1994年度である。以来、香川大学教育学部(以下、本学部という)では、このシステムを利用して、例えば、教科教育法の授業で本学部附属学校教官や教育実習生による授業の観察等の試みが行われてきた<sup>1)</sup>。この学生によるテレビ会議システムを利用した授業観察は、臨場感を伴って観察

ことができ、学生の目的意識の強さが効果に影響を及ぼす傾向はあるものの、このシステムが授業観察の「道具」として有効に機能することが示された。なお、このシステムの正式名称は「ビデオ会議システム」であるが、本稿では通称である「テレビ会議システム」という用語を使用する。

テレビ会議システムは、互いに遠隔地にある学校間の双方向のマルチメディア通信を可能にするものである。本学部附属学校は、附属高松小学校が本学部キャンパスから比較的近くにあ

るものの、その附属高松小学校であっても、簡単に学部と附属学校が交流することは難しい。このような状況の中で、テレビ会議システムの存在を知った本学部附属坂出小学校の6年生の児童が、本システムを利用して本学部の学生と交流を試みるようになった。

このような試みについて、データを収集し分析検討することで、教育実践におけるテレビ会議システムの可能性と限界性を検討するための、そして今後の本システムの有効な利用・活用の在り方について考えていくための基礎資料を得ることが本稿の目的である。

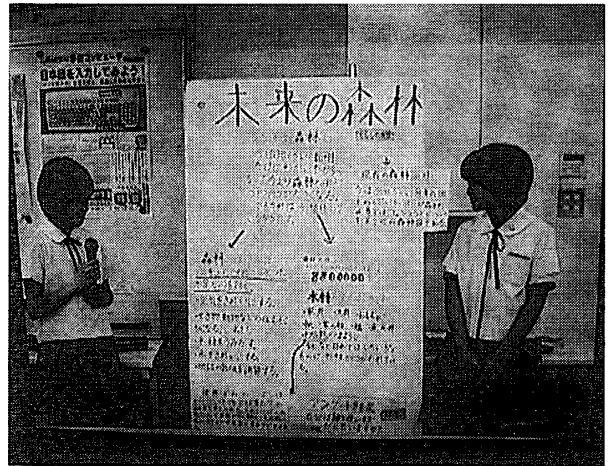
## 2 授業の概要

香川大学教育学部附属坂出小学校6年生(2001年度)の「総合的な学習の時間」においては、くらしを取り巻く様々な事柄をテーマに、50年後の未来予測とそれに向けた提言を行う学習に取り組んでいた。このような取り組みを附属坂出小学校では「未来学習」と呼び、秋の研究発表に向け、テーマごとにグループに分かれて学習が進められていた。

そこで、子どもたちは、テレビ会議システムを利用して、学生にグループで行った調査結果や予測・提案を発表したり、グループ調査に関わる質問をしたりすることで、秋の発表に向けて、発表の内容や発表の仕方について改善・修正するためのアドバイスや調査研究のデータを得ようと考えたのである。この交流の試みは、2001年7月11日(水)午後を実施された。

調査結果や予測・提案を発表し、アドバイスをもらった「私たちのプレゼンにアドバイスを！」グループは以下の通りである。

- ① 洗濯グループ
- ② 森林グループ
- ③ ゴミ分別グループ
- ④ 炊事グループ
- ⑤ 買い物グループ
- ⑥ 旅行グループ

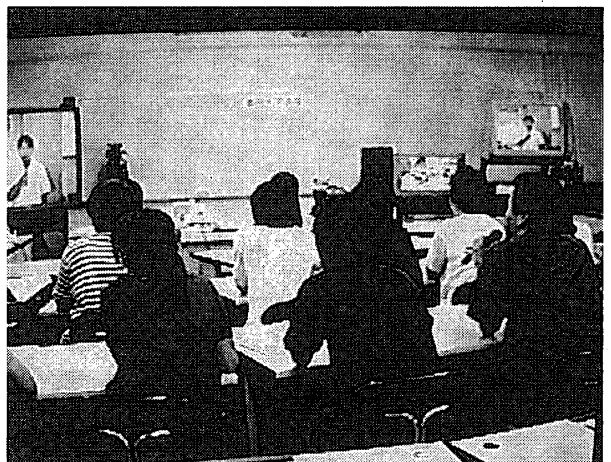


森林グループの発表の様子

また、グループで作成した調査項目について質問し、その場で答えてもらった「私たちの調査に協力を！」グループは以下の通りである。

- ① ゴミ(環境)グループ
- ② 地球温暖化グループ
- ③ 水グループ
- ④ 介護グループ
- ⑤ 掃除グループ
- ⑥ 燃料グループ

「私たちの調査に協力を！」グループには、上記の他に、事前に送付したアンケートを説明しようと考えていたグループ(健康・産業・移動・通信・洗濯・炊事・その他の各グループ)も含まれていたが、時間が足りずに、今回は省略することになった。



香川大会場の様子

### 3 調査とその結果

#### 3.1 調査の目的と方法

授業終了後、テレビ会議システムを用いた児童と学生の交流について、授業に参加した児童及び学生を対象とした調査を行った。本調査の目的は、今後、テレビ会議システムを用いた授業や児童・生徒と学生の交流会を実施する際、本システムの有効な利用・活用の方法を検討するための基礎資料を得ることにあった。

児童を対象とした調査では、「(1) みなさんのことについて」、「(2) 大学生のおにいさんおねえさんのことについて」、「(3) 交流会全体について」の見出しのもと、それぞれ10, 6, 4項目の質問を設け、その一つひとつについて5段階での評価を求めた。5段階での評価は、「1:よくあてはまる, 2:あてはまる, 3:どちらともいえない, 4:あまりあてはまらない, 5:まったくあてはまらない」の中から一つを選択回答するようにした。さらに、自由記述、及びチーム名(グループ名)や交流会で発言や質問ができたかどうかについての設問をおいた。調査は、授業終了後、教室で調査紙を配布し記述を求めた後回収した。授業及び調査に参加した児童数は61名であった。学生を対象とした調査は、児童を対象としたものと同様設問から構成した。学生の参加者は21名であったが、その内、学部学生は13名(2年生10名と3年生3名)、大学院生は8名(全員1年生)であり、その内の4名は現職の教員であった。なお、学生の参加者が少数であったため、学生を対象とした調査設問や調査結果は概要を示すのみに留める。

#### 3.2 調査結果

上に述べたようにアンケート調査は、5段階で評価するようになっていた。それらの回答について、「1:よくあてはまる」または「2:あてはまる」を選択したものを「肯定的回答」、「3:どちらともいえない」を選択したものを「中立的回答」、「4:あまりあてはまらない」または「5:まったくあてはまらない」を選択したものを「否定的回答」と、5段階での評価を3つに集約した。以下では、主として児童を対象とした調査について、3つに集約した回答の分布を示しつつ検討を加える。

##### 3.2.1 児童を対象とした調査の結果

児童を対象とした調査には、「あなたは交流会の中で実際に発言や質問や説明をしましたか」という設問があった。これに対して「はい」と回答した児童を「発言群」、「いいえ」と回答した児童を「非発言群」ということにする。発言群、非発言群の児童数は、それぞれ21名、37名であり、3名は未記入であった。そこでその3名を除く58名の回答を分析対象とした。また、2つの群(発表群、非発表群)と無回答(NA)を除く3つに集約した回答(肯定的、中立的、否定的回答)との2×3のクロス集計表について、有意水準を5%としてカイ2乗検定を行い、有意差がみられた設問については残差分析を行った。以下では、有意差のみられた設問については群別の結果を、そうでないものについては全体(58名の児童)の結果を示すことにする。数値はそれぞれの回答者数であり、括弧内の%値は全体に対する割合(%値)、あるいは各群を全体としたときの割合を示す。

表1 児童に対する設問と回答：みなさんのことについて

	肯定的回答	中立的回答	否定的回答	NA
①準備はよくできました	35 (61.3%)	13 (22.4%)	10 (17.2%)	0 (0.0%)
②学習してきたことについて、ぜひ話したり話を聞いてみたいと思っていました	29 (50.0%)	22 (37.9%)	5 (8.6%)	2 (3.4%)

③うまく発表や質問や説明が できました	発言群	9 (42.9%)	8 (38.1%)	4 (19.0%)	0 (0.0%)
	非発言群	2 (5.4%)	13 (35.1%)	18 (48.6%)	4 (10.8%)
	全体	11 (19.0%)	21 (36.2%)	22 (37.9%)	4 (6.9%)
$\chi^2 (2) = 14.82, p < .01$					
④みんなで協力して発表や質 問や説明ができました	発言群	12 (4.8%)	3 (14.3%)	5 (23.8%)	1 (4.8%)
	非発言群	2 (5.4%)	15 (40.5%)	17 (45.9%)	3 (8.1%)
	全体	14 (24.1%)	18 (31.0%)	22 (37.9%)	4 (6.9%)
$\chi^2 (2) = 19.36, p < .01$					
⑤落ち着いて話すことができ ました	発言群	14 (66.7%)	4 (19.0%)	3 (4.8%)	0 (0.0%)
	非発言群	2 (5.4%)	13 (35.1%)	18 (48.6%)	4 (10.8%)
	全体	16 (27.6%)	17 (29.3%)	21 (36.2%)	4 (6.9%)
$\chi^2 (2) = 22.95, p < .01$					
⑥質問したかったことを、う まくたずねることができま した	発言群	10 (47.6%)	7 (33.3%)	3 (14.3%)	1 (4.8%)
	非発言群	3 (8.1%)	13 (35.1%)	16 (43.2%)	54 (13.5%)
	全体	13 (22.4%)	20 (34.5%)	19 (32.8%)	6 (10.3%)
$\chi^2 (2) = 12.35, p < .01$					
⑦知りたいと思っていたこと が、わかるようになりまし た	発言群	12 (57.1%)	6 (28.6%)	3 (14.3%)	0 (0.0%)
	非発言群	9 (24.3%)	16 (43.2%)	11 (29.7%)	1 (2.7%)
	全体	21 (36.2%)	22 (37.9%)	14 (24.1%)	1 (1.7%)
$\chi^2 (2) = 6.02, p < .05$					
⑧ほかにも聞きたいことや知 りたいことがあります		32 (55.2%)	14 (24.1%)	12 (20.7%)	0 (0.0%)
⑨これから何を考えたり調べ たりしていけばいいかがわ かりました		31 (53.4%)	16 (27.6%)	11 (19.0%)	0 (0.0%)
⑩新しい疑問が出てきました		18 (31.0%)	22 (37.9%)	17 (29.3%)	1 (1.7%)

「①準備はよくできた」とするものは6割であり、否定的回答も2割弱みられる。本授業は、その年の秋に行われる発表会に向けての準備途上の段階にあった。先にも述べたように、本授業は、その時点での学習成果を学生に聞いてもらうと共に、今までに生じた疑問を学生に質問したり、発表会までに行っておかなければならぬことを明らかにするために実施されたものであり、いわば中間発表の意味合いをもつものであった。しかし、中間発表とはいっても児童にとっては対外的な発表の機会であることには変わりない。そのため、準備が十分ではないと感じた児童もいたであろう。しかし、「②学習したことについて話したり話を聞いたりしてみた

と思っていた」とするものは半数であるが、否定的回答は2名しかみられない。多くの児童が、準備途上ではあっても学習の成果を発表しそれに対する反応を知りたいと考えていたことが窺える。

「③うまく発表や質問や説明ができた」「④協力して発表や質問や説明ができた」「⑤落ち着いて話せた」「⑥質問したかったことをうまく尋ねた」「⑦知りたいことが分かるようになった」については、2群間の回答分布に有意差がみられ、発言群の児童の方に肯定的な回答が有意に多かった。これは、当然の結果でもあろう。今後、このような交流会を多く持つことによって、より多くの児童が積極的に参加し発言し得る機会を

もつことが望まれる。

表2 児童に対する設問と回答：大学生のおにいさんやおねえさんについて

	肯定的回答	中立的回答	否定的回答	NA
①私たちの話をよく聞いてくれました	40 (69.0%)	8 (13.8%)	10 (17.2%)	0 (0.0%)
②お話のしかたはよかったと思います	36 (62.1%)	16 (27.6%)	6 (10.3%)	0 (0.0%)
③お話ししてくれた内容は、よくわかりました	38 (65.5%)	12 (20.7%)	8 (13.8%)	0 (0.0%)
④声は、ちゃんと聞き取れました	41 (70.7%)	9 (15.5%)	8 (13.8%)	0 (0.0%)
⑤身振りや手振りがわかりました	25 (43.1%)	16 (27.6%)	17 (29.6%)	0 (0.0%)
⑥表情がわかりました	21 (36.2%)	19 (32.8%)	18 (31.0%)	0 (0.0%)

「①話をよく聞いてくれた」「②話のしかたはよかった」「③内容はよく分かった」については、6～7割の児童が肯定的に回答している。発言した学生の殆どが大学院生であったことから、児童のありようにうまく対応した発言や質問、あるいは助言をしていたことが推測される。

「④声が聞き取れた」ことについては、7割の児童が肯定的に回答している。一方、「⑤身振りや手振りが分かった」「⑥表情が分かった」につ

いては肯定的回答は4割弱であり、否定的回答も3割ほどみられる。一般にテレビ会議システムを用いて授業を観察する場合、映像情報よりも音声情報がうまく伝達されるかどうかが問題となる（松下・長谷川，1998）。7割の児童が「声が聞き取れた」と回答していたことから、今回の本システムを用いた交流会においては、コミュニケーションが成立するための基本的要件を満たしていたとっていいだろう。

表3 児童に対する設問と回答：交流会全体について

	肯定的回答	中立的回答	否定的回答	NA
①大学生にお話しできてよかったですと思います	44 (75.9%)	10 (17.2%)	4 (6.9%)	0 (0.0%)
②大学生のお話が聞いてよかったですと思います	44 (75.9%)	10 (17.2%)	4 (6.9%)	0 (0.0%)
③大学生と交流できてよかったですと思います	46 (79.3%)	7 (12.1%)	5 (8.6%)	0 (0.0%)
④これからもテレビ会議システムを使って交流してみたいと思います	41 (70.7%)	12 (20.7%)	5 (8.6%)	0 (0.0%)

「①大学生と話ができてよかった」「②大学生の話が聞けてよかった」「③交流できてよかった」「④これからもテレビ会議システムを用いて交流したい」に対しては、7～8割の児童が肯定的に回答している。このことから、今回の交流会の試みは、多くの児童にとって有意義な機会となったとっていいであろう。

### 3. 2. 2 児童の自由記述

アンケートの最後に「もっと聞きたいこと、知りたいこと、気づいたことや考えたこと、希望、要望などについて、自由に書いてください。」という自由記述の欄を設けた。

児童の自由記述について、内容は次のように分類される。

①自分たちのグループの追究している問題について

②テレビ会議システムの今後の利用について

③今回のテレビ会議システムの問題点について

④自分たちの発表の評価について

⑤その他

それぞれ具体的にあげてみる。

①自分たちのグループの追究している問題について

・また、よくわからないことがあったらききたい。

・そうじのロボットができると、今までそうじをしていた時間は、何をするのかきいてみたい。

・大学生の人にどのようなそうじきを求めているかきいてみたい。

・そうじの事について大学生全員の意見を聞きたい。

・そうじのことについてききたいです。

・またしらべていってわからないことができたなら、ききたいとおもいました。

・もっとくわしくしらべてしつもんしたい。

・もうちょっとくわしくききたい（電車）。

・もうちょっとくわしくききたい。

・これからもTVかいぎをしたいと思う。

・やってないグループをやってほしい。

・そうじについてどのようにしているかをお

しえてほしいです。

・今、坂出市以外ではどんなゴミ分別がされているか。

・分からない所を、ききたかった。

・もっと新しい分別き、ゴミの量などもっといろんなじょうほうが必要。

・もっとインターネットで大学生の人がいていたことをやりたい。

②テレビ会議システムの今後の利用について

・大学生の人などとまたやってみたい。

・養老学校の人たちともしたい。

・もう一回したい。

・私たちは言えなかったので、また、いいたい。ほかの人（ようごの人とか）にきいてみたい。

・今度はもっとほんかく的なTVの会議をしたい。

・アンケートの説明をするつもりで用意していたのに、発表できなかったの、またきいてほしい。

・テレビ会ぎを大学生だけでなく、ようごのみなさんにやってみてもよいと思った。

③今回のテレビ会議システムの問題点ややり方について

・もっと身ぶり手ぶりなどが見えるようにしてほしい。声が大きくてよかった。

・テレビ会議ははじめてなので、発表はしなかったんだけど、ドキドキしました。ふうにはなすときより、ききとりにくいので、ちょっと不安になりました。

・カメラでうつるえいぞうをもっとスムーズに、うつしてほしい。（と中でつまったから）

・がぞうがとまったときがきになった。

・カメラで映るえいぞうがとまりどまりだったのでもっとスムーズにしてほしい。

・テレビ会議をしているときにちょっとがぞうが止まったことが気になった。

・もっと時間を長めにしてほしい。

・あまりとまらないように マイクを増やす

・マイクをもう少しふやしてスピーディにや

りたい。

- ・動作はすこし、ゆっくりしないといけない。
- ・時間が短かった。

#### ④自分たちの発表の評価について

- ・自分たちの発表のよかったところが知りたい。
- ・私たちの発表のよいところや悪いところがしりたかったです。
- ・私たちのチームのいいたいことが分かってくれるといいなあと思いました。

#### ⑤その他

- ・やってないのでわからない。
- ・もごもごしていたので、相手（大学生）が少しイライラしていた人がいた。
- ・どうしてつながるか。
- ・今度は附属坂出小学校に来てほしい。それでいろいろ話したい。
- ・あまりありません。今日やったので、～よくわかった。
- ・大学生と考えることがちがった。
- ・アンケートに書いていること。お母さんたちの考え。
- ・アンケートをしていることと同じです。

以上のように①「自分たちのグループの追究している問題について」の記述が最も多かった。例えば、「そうじのロボットができれば、今までそうじしていた時間は、何をするのか聞いてみたい」、「ほかのどんなかんきょうもんだいがあるか」など、自分たちが追究している問題についてもっと情報を得たいといった内容が見られた。これは、テレビ会議システムの活用の問題ではなく、授業内容そのものへの関心だといえる。しかし、これは、別の見方をすると、テレビ会議システムが子どもたちの学習の中で違和感なく利用されていることを示すものだといえよう。

また、②については、「大学生の人などとまたやってみたい」、「養ご学校の人ともやってみたい」など、テレビ会議システムの今後の利用に

ついて前向きな考えが多く見られた。と同時に、「今度はもっとほんかく的なTVの会議をしたい」といった意見も見られ、これは③のテレビ会議システムの問題にも関わるが、今回の試みより以上のことを望む子どもがいたことを示す。

③「今回のテレビ会議システムの問題点について」では、興味深い意見が見られた。まず、「カメラでうつるえいぞうをもっとスムーズに、うつしてほしい」、「がぞうがとまったときがきになった」など、今回利用したテレビ会議システムのそのもの問題点を指摘する記述も見られた。それだけではなく「マイクをもう少しふやしてスピーディにやりたい」や「動作はすこし、ゆっくりしないといけない」といった本システムを利用する場合の留意事項について述べているものも見られた。このことは、限られた条件の中で本システムをいかに活かすことができるかを考えながら、今回の交流に参加していた子どもがいたということを示す。

また、④「自分たちの発表の評価について」に関しては、「自分たちの発表のよかったところが知りたい」、「わたしたちの発表のよいところや悪いところがしりたかったです」など、秋の発表会に向けての準備としても位置づけられる授業であったので、自分たちのグループの発表への評価を求めた記述も見られた。ただ、この点は今回の交流における子どもたちのねらいの一つであったが、記述は少なかった。子どもたちの意識は、自分たちが追究しているテーマやテレビ会議システムの方にやや強く向いていたと考えられる。

⑤「その他」に分類したものには、「どうしてつながるか」といった本システムそのものへの疑問や「今度は附属坂出小学校に来てほしい。それでいろいろ話したい」といった対面的なかわりを求める意見があった。また「もごもごしていたので、相手（大学生）が少しイライラしていた人がいた」という意見もあり、本システムで送受信される映像の鮮明さは不十分であっても、感情的な要素まで伝わっていたことを窺うことができる。

### 3. 2. 3 学生を対象とした調査の結果

テレビ会議システムを用いた交流会終了後、学生を対象とした調査も実施した。前述したように、設問項目は児童を対象としたアンケートとほぼ同様のものであった。

児童を対象とした調査と同様に回答を肯定的回答、中立的回答、否定的回答の3つに集約して検討したが、概ね肯定的回答が多くをしめた(煩瑣を避けるため、個々の結果を示すことは省略する)。但し、「子どもたちが示した発表資料や掲示物が読みとれた」に対しては、4割強のものが否定的に回答していた。児童が示した資料や掲示物の多くは模造紙に書かれたパネル状のものであり、対面状況下での相手への説明を想定して作られたものであった。そのため、テレビカメラによる映像の伝達に限界のあったことは否めない。尤も、他の6割のものは肯定ないし中立的回答をしている。このことから、映像から何を読みとろうとするか、映像の何に注目しているかといった、いわば映像に対する聴視者の態度もこの設問への回答に関連していよう。

松下・長谷川(1998)は、学生を対象としてテレビ会議システムを用いた授業観察についてのアンケート調査を実施し、学生を教職志望の学生(教師志望群)と教職以外の職を志望している学生(教師以外志望群)の2群に分けて検討を行っている。その結果、テレビ会議システムを用いた授業観察について、授業内容の理解や映像の動き等で教師志望群に有意に「問題はない」とする傾向がみられたという。今回の交流会では学生の参加者数が少数であったため、十分な調査を行うことができなかった。しかし今後は、学生の参加者数をより多くした上で調査・検討を行うことによって、どのような聴視者がどのような点に着目しているか、あるいは現職教員と学生との注目点の差異等を明らかにすることが望まれる。

### 3. 2. 4 学生の自由記述について

児童へのアンケートと同じく、学生へのアンケートにも最後に、「もっと聞きたいこと、知り

たいこと、気づいたことや考えたこと、希望、要望などについて、自由に書いてください。」という自由記述の欄を設けた。

参加した学生が少数であったため、自由記述は以下のものにとどまった。

- ・時間的余裕がなく質問が充分できなかった。
- ・小学生と交流する場が持てたのが良かった。しかし、もっとはやく知らせがくれば、時間が作りやすいと思った。
- ・時間配分を考えて会議をする方がよいと思う。
- ・私は今、環境問題について勉強しているのですが、是非、小学生がどのような観点から、環境問題などにとりくんでいるのか知りたいと思っています。
- ・実際に使ってみるとおもしろいので、もっと使ってみたいです。
- ・みなさんよくできました！！
- ・テレビ会議よりも、実際にあってやった方が相手とのコミュニケーションをとりやすい。

今回の交流会に関する開催の連絡周知や時間の配分の問題など、テレビ会議システムの活用以前の問題が指摘された。また、本システムの今後の活用を積極的に求める意見や、逆にテレビ会議システムよりも対面的なコミュニケーションを求める意見が見られた。前者のような見方でテレビ会議システムを利用する場合と、後者のような見方で利用する場合では、その効果に対する期待の度合いがかなり異なるとともに、実際にその効果も異なってくるのではないかと予想される。児童との交流にテレビ会議システムを活用することに関するこのような評価の違いは、どのようなことから生まれてくるのか掘り下げて検討することが必要である。

## 4 考察

テレビ会議システムを利用することが、授業や児童の取り組みに対してプラスの影響があったと言えるであろうか。

前述したように、児童への調査の結果、「ぜひ話したり話を聞いてみたいと思っていた」ものが半数であり、否定的な回答は少なかった。こ



れは、多くの児童がテレビ会議システムを利用することに期待していたことを示すものとみてよいだろう。

また、児童の自由記述においても「もっと聞きたい」とするものが多く見られること、同様に児童への調査では、「テレビ会議システムを使って交流したい」とする児童が7割、「大学生と交流できてよかった」とする児童が8割ほど見られる。これもまた、テレビ会議システムが自分たちの学習のために有効であるととらえている児童が多いことを示すものであろう。

ただし、児童たちの今回交流した相手が、大学生もしくは大学院生であったことには留意しておく必要がある。児童たちは先生でもなく仲間でもない「学生」の存在をどうとらえているのか。附属学校の児童であるため、実習生としての学生とかかわる機会が多いとはいえ、少なくとも先生や仲間に比べれば、学生は児童にとって見知らぬ存在、具体性に乏しい存在だろう。とりわけ、初対面の学生と交流する今回の場合はそうであろう。そのような存在である学生と対面的にかかわらずに済ませることができるテレビ会議システムを利用したかかわりが、最初の段階としては子どもたちにとっては程よいかかわりととらえられたのかも知れない。そのように考えると、テレビ会議システムは、互いに遠隔地にいる対面的なコミュニケーションが困難な者同士が双方向でやりとりをするためのものであるが、児童にとっては、先生でも仲間でもない初対面の学生、言い換えれば心理的に距離のある他者とのやりとりの最初の段階のツールとしても有効なものであったのではなかろうか。

さて、それでは、テレビ会議システムの使用は妥当であったろうか。テレビやテレビゲームなど、ブラウン管やモニターによる試聴に慣れている児童にとっては、テレビ会議システムの映像は決して見やすいものではなかったであろう。しかし、前述したように、テレビ会議システムでは、映像情報よりも音声情報がうまく伝達されるかどうかの問題となる。この点に関しては、今回の交流会はコミュニケーションが成

立するための基本的要件を満たしており、本システムの利用は妥当であったといえよう。

もちろん、対面下での説明や質問が可能であれば、それが最も適切である。今回の交流会のように、それが困難な場合への対応あるいは補助的道具としてであれば、TVシステムの使用は有効であろう。

さて、今回の交流会は、時間的な配分がうまくいかずに、予定していたアンケートの説明ができなかったグループがいくつかあった。このような発言できなかったグループ・児童への対応については、考慮する必要がある。発言できなかった児童の自由記述の中にも、やりたかった旨の記述がかなりみられた。秋の発表会までに、もう一度このような機会を持ち、前回発言しなかった児童で発言を希望する児童が発言するように指導していく必要があったであらう。そして、それによって発言の機会を保証したり、第2次中間発表を目標として学習を進めることもできるようになるのではないか。

今回のテレビ会議システムを利用した交流は、試行的に実施したものであり、今後の検討課題が多く残された。それについて最後に、いくつかとりあげておく。

まず、参加学生の自由記述の中では、交流会に関する開催の学生への連絡周知や時間的配分の問題など、テレビ会議システムの活用以前の問題が指摘された。このようなシステムを利用した交流会においては、授業者との打ち合わせも含めて、一般の事業よりも細やかな事前準備が必要となる。

また、テレビ会議システムについての参加者の事前の意識を明らかにして、それが本システムの利用の評価にどのように関連しているかを問うことも必要であろう。

児童の側に関しては、今回のような学生との交流と初対面ではない他者との交流では異なる点があるのかどうかも興味深いところである。学生に関する課題としては、前述したように、今後、学生の参加者数をより多くした上で調査・検討を行うことによって、どのような聴視者がどのような点に着目しているか、あるいは現職

教員と学生との注目点の差異等を明らかにすることが望まれる。

#### 参考文献

- 1) 松下文夫・長谷川順一（1998）「ビデオ会議システムを用いた授業観察に関する基礎的研究」香川大学教育実践研究 第29号.

#### 謝辞

本報告の調査に当たってご協力いただいた、附属坂出小学校の子どもたち、その子どもたちとの交流会に自主的に参加していただいた香川大学教育学部学生、香川大学大学院教育学研究科大学院生の方々に対して、ここに記してお礼申し上げます。